

# 忠徳の儉約術

酒井家9代忠徳は、元禄時代頃からの奢侈(度を過ぎたぜいたく)や幕府の普請による莫大な出費、相次ぐ自然災害、飢饉などで財政が窮乏した時代に、幼くして藩主になりました。といっても、幼少期の忠徳は、

江戸で立派な大名道具【写真1】を調べてもらって藩主になりましたので、庄内の財政状況を実感する機会は数年後のことでした。

この時、忠徳は両眼に涙を浮かべて悲嘆しました。よく知られている話ですが、「お金がないことを悲しんだ」と誤解している方も多

大藩の大名が幼少で家督相続すると、参勤交代は免れられません。領知へは、代わりに幕府から国目付が派遣されました。忠徳も同様で、庄内へ初めて入部したのは明和9(安永元)年(1772年)、18歳の時です。その時、大変な事態が起こります。忠徳の庄内への初入部の少し前、江戸の大火で神田橋と下谷の藩邸が類焼します。江戸では財政難のため参勤交代の旅費を用意でき



酒井家庄内入部400年

情を目の当たりにした出来事の一つであり、藩政改革に取り組み契機となりました。忠徳が生きた時代は、異常気象による冷夏も多く、鳥海山は二度も噴火【写真2】し、大地震も発生しています。飢饉が何年も続き、改革は挫折を繰り返しました。忠徳は諦めず、自身も

## その① 鮭の切り身

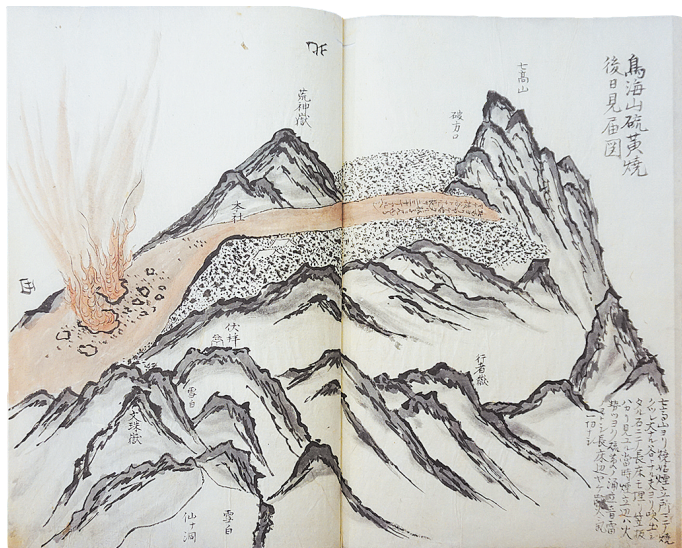
忠徳が生まれた時代は、異常気象による冷夏も多く、鳥海山は二度も噴火【写真2】し、大地震も発生しています。飢饉が何年も続き、改革は挫折を繰り返しました。忠徳は諦めず、自身も



このことを女中に聞いたところ、「殿様が手を付けたので、自分たちで残りを食べたい。今新しい

## 【写真1】酒井忠徳所用軍配団扇

同じものが2本あり、企画展会場と御隠殿で見ることが



【写真2】享和元(1801)年に大噴火した鳥海山の届書写生図(「大泉叢誌 巻28」)

命令に背くのは慎むようにと戒めた。

## 【写真2】その② 登城(出勤)しない

江戸にいる際の「月並登城」など、病氣と称して出勤しなかった。他の大名の非難や、義弟で老中の松平定信の忠告も聞き入れず、大名の責務は他にあると考

佐藤淳